

<2018年度 第2回定例研究会>

コミュニティに強いソーシャルワーク 実践を考える研究会

実践報告者：

那須 久史 (熊本市高齢者支援センターささえりあ
帯山センター長・社会福祉士)

田口 善信 (熊本市高齢者支援センターささえりあ
浄行寺管理者・社会福祉士)

座長：

黒木 邦弘 (熊本学園大学附属社会福祉研究所長・
社会福祉学部准教授)

日 時：2018年9月29日(土) 13時00分～15時00分

2018年第2回定例研究会では、「コミュニティに強いソーシャルワーク実践を考える研究会」というタイトルのもと、那須久史氏(熊本市高齢者支援センターささえりあ帯山センター長・社会福祉士)と田口善信氏(熊本市高齢者支援センターささえりあ浄行寺管理者・社会福祉士)を実践報告者としてお招きし、本学附属社会福祉研究所長・社会福祉学部准教授の黒木邦弘氏に座長を務めていただきました。以下、その概要についてご報告いたします。

はじめに、座長の黒木邦弘氏により本研究会の趣旨について説明がなされました。本研究会では、地域共生社会の実現に向けて、ソーシャルワークが展開できる実践研究の方向性について議論しようということで企画されました。具体的には、(一社)日本ソーシャルワーク教育学校連盟が企画・実施する「コミュニティに強いソーシャルワーカーを養成する研修会(以下、コソ研)を受講した実践者の報告に基づき、ソーシャルワークが重視する価値とマイクロ・メゾ・マクロの視点を基本枠組みに、個人だけでなく世帯や家族全体をとらえ、多職種・地域住民と連携・協働しながら、「丸ごと」支援する体制などを考えるという内容です。

さらに、2018年9月16・17日(日・祝)に本学にて開催されたコソ研の内容について紹介がなされました。7つのセッションに分かれており、1日目には①ソーシャルワークとは?②コミュニティ(地域)とは何か、そこで暮らすとはどういうことか、③コミュニティに対するソーシャルワークのアセスメントとは、2日目には④地域を基盤としたソーシャルワークの全体像、⑤ソーシャルサポートネットワークと社会資源開発、⑥「コミュニティに強い」ソーシャルワークの政策動向、⑦「コミュニティに強い」ソーシャルワーカーになるために必要な力という内容で進められたこと、そのなかで

のキーワードや重要となる考え方について報告されました。

上記の説明・報告を踏まえて、2名の実践報告者(コソ研受講者)により、コソ研に参加してのご感想を簡潔に述べられたのち、認知症の住民の支援例について発表がなされました。まず、熊本市高齢者支援センターささえりあ浄行寺の田口氏からは、ごみが散乱していた60代男性の事例について、課題検討型地域ケア会議を開催し、地域住民と一緒に片付けする日を決め、ごみ処分費用の支給を実施したことや、熊本県社会福祉法人経営者協議会が社会貢献事業として行っている生活困難者レスキュー事業を活用した事例が紹介されました。田口氏は、差別や排除ではなく、本人が自立した生活を送るためには地域の支援が重要になること、支援を行うことで地縁のつながり、地域のエンパワメントや資源の開発にもなりうることを強調されていたのが印象的でした。

続いて、熊本市高齢者支援センターささえりあ帯山的那須氏からは、乳がん手術後の女性の事例について、生活不安定期から生活構築期を経て生活再建期に至るまでの過程が紹介されました。民生委員を含めた地域ケア会議を開き、カンファレンスを重ね、本人の生活歴や社会資源の"強み"に焦点を当てたことで生活再建につなげられたという内容でした。保健・福祉・医療の専門職相互の連携、さらにはボランティアといった住民活動などインフォーマルな活動を含めた地域の様々な資源を統合・ネットワーク化し、高齢者を継続的かつ包括的にケアすること、さらには、福祉サービスの受け手が担い手になるケースもあり、これらの地道な取り組みの経験を蓄積することの重要性を述べられました。

実践報告者の報告終了後は、フロアを交えての質疑応答がフリーディスカッション形式で進められました。コソ研に参加もされた同業種の方や、コミュニティに強いソーシャルワーカーを養成・教育する立場にある教員の方からのご質問をいただき、地域住民がよりよく生きていくためにはチームとしての支援が求められること、また、地域住民の参画と協働により誰もが支え合う共生社会の実現につながることの共通認識があらためて図られました。それぞれの地域における具体的な実践の報告から多種多様な問題についてともに考える本研究会は、価値を確認し合い、気づき合い、学び合うというまさにコソ研でのキーワードとなる「ダイアログ」のとらえ方そのものの時間であったと感じました。また、研究会終了後のアンケートでも、非常に有意義な内容として評価されており、今後も定期的な開催を期待する声が多く挙げられました。

(研究会報告者：藤塚千秋)